大阪日日

『重役の家を片ッ端から焼いて仕舞へ』

死物狂ひに猛り立つた 藤永田造船の職工團

友愛會關西聯合會は七日午後二時より天王寺公會堂に開いて居た通り代議員會に於て別記の決議案を作製したが依つて別記の決議案を作製したが會合に加つて此形勢を見て取つた藤永田造船所第三次實行委員村田保外四名は勢ひづいて敷津分工場に引揚げ組織らず宣業して革命歌を唄ひ續けてゐる二千餘名の同志職工に此由を傳へ猶第三次要求の回答は當日ある筈だが結局駄目らしいと報告するや一齊に猛り立ちはらくは叫び喚く聲で工場を壓したが結局要求を寸分の修正なく容れられねは何時迄も此狀態を續け工場主側が何とか策するを待つことに決議した同日二百餘名の私服刑事は密に工場内に入り込み職工の集合してる新設倉庫にも入り込まうとしたが死物狂ひの職工から「ぶち殺すぞ」と嚇かされて其の周圍を歩き廻るに止めて居た職工中の過激な分子は「どうしても要求が容れられなかつたら鈴木造船課長の邸宅から順次重役の家を燒いて仕舞へ」などゝ高聲に叫び歩いて今回の調停者として立つたわけではないと語つてゐた。一方敷津工場では午後四時の終業時となるや職工二千三百名は村尾造船所職工約二百名の應援を得て木津川の渡しを渡り、本工場前を隊伍を組んで勞働歌を高唱して示威運動を行つたが格別の擧行もなく從つて檢束者もなかつた

關西勞働同盟 勞働爭議演說

關西勞働聯合會藤永田爭議批判演說會は七日午後七時から南區下寺町大蓮寺に開催、定刻前から藤永田の職工團や友愛會を始め市内の各勞働團隊が口々に勞働歌を高唱しながら詰めかけて其の數三千餘さしもに廣い境内も忽ち人を以て埋まつて仕舞つた。第一次で藤永田の職工二上氏は起つて警官の干渉を高唱し賀川氏の代理として第一實行委員であつた阪井氏は實行委員と會社側との會見の顚末を報告して之に批判を加へ會社側當局者の無能無誠意を痛罵し引續いて松島氏以下十數名交々起つて警官の壓迫を詰り勞働者の自覺を促した後東京から來阪した友愛會本部理事松岡氏は勞働爭議としての大電、藤永田の事件を批判して九時四十分頃解散したが閉會當初多少險惡な氣分が漲つたが何事も無くて穩かに濟んだ

關西勞働同盟會

一齊憤起

友愛會の決議文

藤永田造船所の勞働爭議は關西勞働者の團結に對する資本家の一大挑戰なり我關西勞働同盟加入會員は此際一齊に起ちて徹底的に戰はん

大正十年六月七日

關西勞働同盟會

此決議は獨り友愛會總會のみならず向上會關西工組合、鐵工組合等を含んだ同盟の名で發表したのであるから總會に依つて是等大組合數萬の職工が一齊に示威運動及び同情罷工を行ふかも知れず事態は刻々に險惡の度を增して居る

大阪日日

喊聲をあげて 道頓堀を駈足

藤永田の職工二千名 大擧して演說會場へ 大蓮寺で氣勢を揚ぐ

藤永田造船所本分兩工場の職工員以下市内各署の應援を求め警官數百名を周圍に配置し嚴重警戒した

藤永田造船所勞働爭議の應援會々場市内南區下寺町六丁目大蓮寺に向ひ何れも徒歩で電車道に出で東進して西道頓堀筋より道頓堀に入り勞働歌を高唱し物凄き喊聲を擧げながら午後六時過ぎ大蓮寺に

作業服 のまゝ關西勞働聯合會主催の同造船所勞働爭議の應援會々場へ

藤永田造船所本分兩工場の職工員以下市内各署の應援を求め警官數百名を周圍に配置し嚴重警戒した

到著し 敷名の

直ちに表門に立ち關係者外を入れしめず本堂前庭鐘樓等はカーキー服色の作業服にて全く埋められ其數約二千、所轄高津署の許可を受くる間も勞働歌を高唱して盛に氣勢を擧げた、斯くて午後七時會長島種吉氏の司會の下に造船工組合二上君以下辯士交々增上に現れて過日來の經過を報告すると共に資本家の橫暴を鳴らし警察官の不法高壓を說いて勞働者側の結束を促し最後に友愛會の松岡理事一場の挨拶を述べて解散したが高津署よりは前田署

天保商船會社出帆

シャトル行 あふりか丸 六月十日
コマ行 正午神戸
南米行 靖河丸 田邊三西商行 たこま丸 七月二日